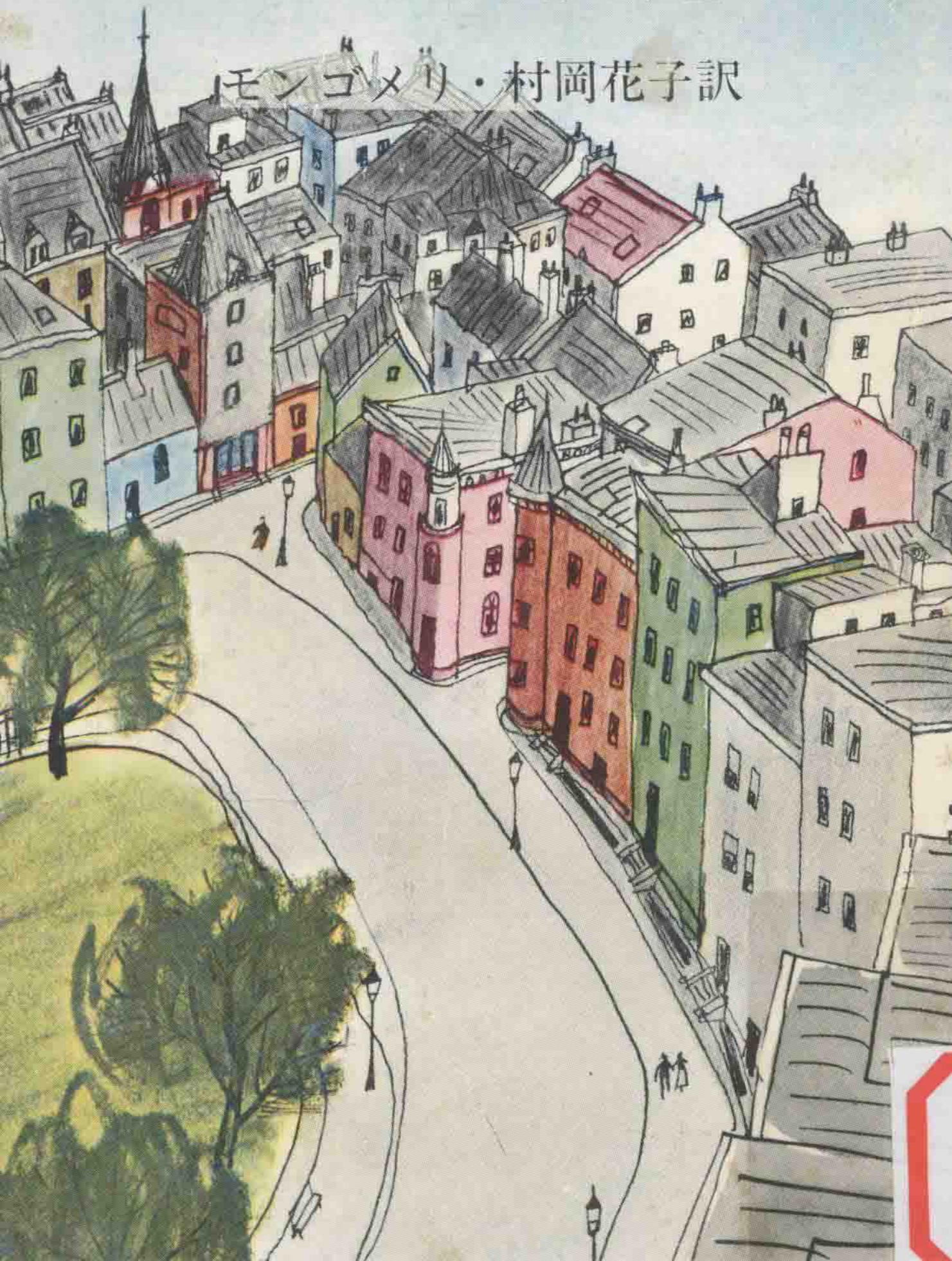
アンの友達

モンゴメリ・村岡花子訳



アンの友達
—第四赤毛のアン—

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 赤113 D

昭和三十二年一月三十日 発行
昭和四十五年十一月十五日 二十七刷改版
昭和五十年十月二十日 三十五刷

訳者 村岡花子
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四—八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所
© Midori Muraoka 1957 Printed in Japan

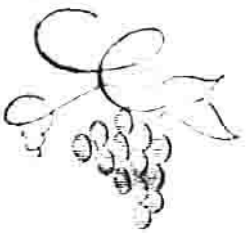
新潮文庫

アンの友達

—第四赤毛のアン—

モンゴメリ

村岡花子訳



新潮社版

1016

目次

一　奮いたったルドヴィック……七
二　ロイド老淑女……二三
　五月の章……二三
　六月の章……三八
　七月の章……四五
　八月の章……五三
　九月の章……六〇
　十月の章……七一
三　めいめい自分の言葉で……七八
四　小さなジョスリン……一一五
五　ルシンダついに語る……一三四
六　ショウ老人の娘……一五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

七　オリビア叔母さんの求婚者……一七一
八　隔離された家……一九七
九　競売狂……二三七
十　縁むすび……二四一
十一　カーモディの奇蹟……二五九
十二　争いの果て……二八〇
あとがき……二九八

アンの友達

——第四赤毛のアン——

人生の平凡なことがらの下に
秘められた美しさは歌われずして過ぎていく。

――フィテヤーの詩より

一　奮いたったルドヴィック

ある土曜日の夕方、テオドラ・ディックスの居間にアン・シャーリーは背中を丸くしてすわり、夕日が落ちた丘のはるかかなた、美しい星の国を追って、夢見るようなまなざしをしていた。アンはステフェン・アービング夫妻が避暑にきている山彦荘で、二週間の休暇を過すために訪れていたので、古いディックス家の屋敷へはたびたび、テオドラとおしゃべりをしに出かけて行った。この夕方は二人ともしゃべりつくしてしまったので、アンは心ゆくばかり空中楼閣をきずくのに余念なかった。暗紅色の髪を編んで花冠のように巻きつけた、かっこうのよい頭を窓枠にもたせ、灰色の目は、小暗い池におちた月光のように輝いていた。

そのとき、ルドヴィック・スピードが小径をくるのが見えた。ディックス家の小径は長いので、ルドヴィックはまだ家から遠く離れたところにいたが、どんなに遠くからでも彼ということがわかった。彼のように背が高く、やや前かがみの姿勢で、悠然たる態度の持主は、グラフトンの町じゅうに二人といないからである。その身のこなし一つ一つがルドヴィック独特のものであった。

夢想からさめたアンは、気をきかして帰るにこしたことはないと考えた。ルドヴィックはテオ

ドラに求婚中なのである。グラフトン全町がそのことを知っていたし、また、かりに知らない者があるとしても、それは知るだけの時間がなかったせいではない。ルドヴィックがいまと同じもの思いに沈みながら、悠揚せまらないようすでこの小径をテオドラに会いに通いはじめてから、十五年にもなるのだから！

細っそりした、娘らしい、ロマンチックなアンが立ちあがり、出て行こうとすると、むっくり肥えた、中年の、実際家のテオドラがおかしそうに目を光らせながらとめた。

「急がなくていいのよ。まあ、すわって、ちゃんと終りまでいらっしゃい。あんたはルドヴィックが小径をくるのを見たもんで、ここにいてはじゃまになると思ったのでしょう。でも、そんなことはないのよ。ルドヴィックは第三者がそばにいたほうが好きだし、わたしもそうなのよ。いわば、話にはずみがつくというわけね。週に二回、十五年も会いにくるのでは、おたがいに話の種も尽きてしまいますよ」

ルドヴィックに関するかぎり、テオドラにははにかみなどというものはなく、はじらいもせずにルドヴィックのことや、その遅々たる求婚ぶりを口にした。事実、彼のやり方をおもしろがっているらしかった。

アンはふたたび腰をおろした。そのへん一帯に繁茂したクローバー畑や、眼下にかすむ谷からうねうねと出たりはいったりしている、青い輪なりの河を落ち着きはらってながめながら、ルドヴィックが小径づたいにやってくるのを、テオドラと二人で見まもっていた。

アンはテオドラの穏やかなりっぱな顔だちを見ながら、もしも自分がここにすわり、一見、こ

んなにながい間決心のつきかねている年輩の恋人を待つ身であったとしたら、どんな気持がするものか、想像してみようとしたが、どうにもこればかりはアンの想像力でもおよばなかった。

「とにかく、あの人をいいと思ったら、あたしならなんとかせきたてる方法を考え出すわ」アンはいらいらしてきた。「ルドヴィック・スピードですとさ！　スピード（速力）なんて、こんな似ても似つかぬ名前がまたとあるかしら？　あんな人にこんな名前がついてるのは人をだます罠のようなもんだわ」

やがてルドヴィックは家にたどりついたが、今度は入口の階段のところで、桜の果樹園のもつれからんだ、青々とした木立ちを見つめながら、あまりいつまでも瞑想にふけっているので、ついにテオドラが立って行き、ルドヴィックがノックもしないうちにドアをあけた。テオドラはルドヴィックを居間へ連れてくると、彼の肩ごしにアンに向い、おどけたしかめ顔をしてみせた。

ルドヴィックは愉快そうにアンに微笑してみせた。彼はアンが好きだった。ルドヴィックの知っている若い娘といえば、アンだけだった。普通、彼は娘たちを避けていた――まのわるい、場はずれの思いをさせられるからである。しかし、アンはそのような気持にさせなかった。アンにはあらゆるタイプの人間と呼吸を合わせていくこつが身についているので、まだあまりながいつきあいではないのに、ルドヴィックもテオドラもアンを古くからの友と見なしていた。

ルドヴィックは背が高く、いくらかぶかっこうではあったが、悠揚せまらざる落ち着きがあるために、元来は、彼と縁のないはずの威厳がそなわっていた。たれた絹のような褐色の鼻下ひげ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、ふさふさちぢれたインペリアル（訳注　下唇の直下にわずかにはやしたひげ）をたくわえていた――それはグラフトンの町ではふう変りな行き方と見られていた。グラフトンでは男はあごをきれいにそるか、またはあごひげを一面にはやすか、どちらかであった。ルドヴィックの夢見るような目は晴れ晴れとしており、その青い底に一抹の憂愁をたたえていた。

ルドヴィックは、テオドラの父の代からあった、大きな、かさばった、古い肘かけ椅子に腰をおろした。ルドヴィックがいつもそこにすわるので、アンは椅子までルドヴィックに似てきたと言いだした。

話はまもなく活気をおびてきた。だれか引出してくれる者がありさえすれば、ルドヴィックは巧みな話し手であった。本もよく読んでおり、グラフトンにはかすかなこだまとして聞えてくるにすぎない広い世界の人事や、諸問題に関して、たびたび、アンをびっくりさせるような鋭い批判をくだした。また、テオドラと議論をたたかわすのをも好んだ。テオドラは政治とか、歴史の進展などにはあまり関心をもたなかったが、宗教の教理には熱心で、それに関するあらゆるものを読んでいた。キリスト教の信仰療法（訳注　医薬によらず祈禱で病気をなおそうとすること）について、ルドヴィックとテオドラとで仲のよい口論の渦巻へ移るのを見て、アンは自分が役にたつことはさしあたりなさそうだし、いなくてもさしつかえないことを知った。

「星の出る時刻だし、おやすみの時ですわ」

と、言って、アンは静かに立ちあがった。

しかし、家からはだいじょうぶ、見えない、白や金色のひな菊が星のようにちらばっている緑

の牧場に出ると、アンは足をとめて笑わずにはいられなかった。ふくいくたる香りをのせた風がやわらかく吹きすぎる。アンは道角の白樺の木にもたれて思いっきり笑った。平生でもルドヴィックとテオドラのことを考えるたびに、ともすれば笑いたくなるのだった。若い血潮のたぎるアンにとって、この二人の求婚はたまらなくこっけいに思われた。アンはルドヴィックが好きではあったが、いらいらさせられることも確かだった。

「なんて大きな、じれったいおばかさんでしょうね」と、アンは声を出して言った。「あんな愛すべきおばかさんてないわ。ちょうどあの昔の歌に出てくる、先へ進みもしないし、じっとしてもいないで、ただ、ひょいひょい浮いたり沈んだりばかりしている、あの鰐にそっくりじゃないの」

それから二日たった夕方、ディックス家を訪れたとき、アンとテオドラの話はルドヴィックのことに落ちていった。まれにみる働き者のうえに刺繍気ちがいのテオドラは、すべすべと肥えた指をせっせと運んで精巧なバッテンバーグ・レースのテーブルセンターを刺していた。アンは小さなゆり椅子にかけてほっそりした手を膝に重ねテオドラをながめていた。恰幅のいい、ジュノー（訳注　ローマの女神）ふうのひきしまった白い肉づき、大ぶりな彫りの深い顔だち、大きな、牝牛のような鳶色の目。テオドラが非常に端麗なのをアンは知った。微笑をたたえていないときにはたいそう威厳があり、ルドヴィックが尊敬の念をいだくのももっともだとアンは思った。

「ルドヴィックとあの土曜日の晩、ずっと信仰で病気をなおすクリスチャン・サイエンスの話をしていらしったの？」

アンはたずねた。

テオドラの顔に笑いがひろがった。

「そうよ、そのことでけんかまでしたのよ。少なくともわたしはね。ルドヴィックはどんな人とでもけんかということをしない人ですからね。あの人と言い合いをするのは、のれんと腕押しをするようなものよ。わたしだって打ち返そうとしない人に力んでみせるのはいやですよ」

「テオドラ」アンはすかすような口調で言いだした。「あたし、たちいった、失礼なことを伺いたいんだけれど。なんだったらしかりとばしてくださってけっこうよ。なぜ、あなたとルドヴィックは結婚なさらないの？」

テオドラはのんきそうに笑った。

「それはずいぶん前からグラフトンの町じゅうがもってる謎だと思うのよ、アン。そう、わたしはべつにルドヴィックとの結婚に異議はありませんよ。これほど正直な話はないでしょう？　でもね、先方から申し込んでくるんでなかったら、結婚なんて簡単にできるもんじゃありませんよ。ルドヴィックは一度もわたしに申し込まないんですもの」

「あの人あんまり内気すぎるんですか？」

と、アンは追求した。テオドラの気が向いているのになぜだろう？　このわけのわからぬ問題をアンは根底まで探ろうとした。

テオドラは手仕事をとり落し、夏景色の青々とした斜面を、思いに沈む目でながめた。

「いいえ、そうではないと思うのよ。ルドヴィックは内気じゃありませんもの。ただ、それがあ

の人の行き方なのよ――スピード家のね。あそこの家の人たちはみな、おそろしく慎重ですからね。ひとつのことをするにも、何年も思案したすえ、ようやくそうと決心するのよ。ときにはあまり思案ばかりする癖がついてしまって、やらずじまいになることもあるのよ――オールダー・スピードおじいさんのようにね――おじいさんはいつも、英国にいる兄弟に会いに行くと言いながら、一度も行かなかったのですからね。どう考えても行ってならない理由はどこにもないのにね。あの人たちはものぐさじゃないのだけれど、手間どるのが好きなのよ」

「では、ルドヴィックはそのスピード式のじつにはなはだしい実例というわけなのね」

「そのとおりなの。あの人はこれまで一度もことを急いだためしがないのよ。だって、自分の家の塗りかえのことで、この六年間も思案しているんですからね。おりにふれてわたしに相談し、色まで選ぶのだけれど、さて、そこでとまってしまうの。あの人はわたしを好きだし、いつかは結婚してくれと申し込むつもりではいるのよ。問題はただ――その時が果たしてくるかどうかということなの」

「なぜ、あの人をせきたてないの？」

アンはいらいらしてたずねた。

テオドラはまたもや笑いながら、ふたたび刺繍にとりかかった。

「ルドヴィックをせきたてることができるとしても、わたしの力ではできないわ。わたしはあんまり内気だから。こんな年をして、こんな大きなりをした女がそんなことを言うと、こっけいに聞えるでしょうが、でもほんとうなのよ。むろん、スピード家の者と結婚するのだったらそれ

よりほかに方法はないということは承知しているの。たとえば、わたしのいとこで、ルドヴィックの兄弟と結婚した人があるのよ。まさか、そのいとこのほうからあからさまに先方に申し込みをしたとまではわたしも言わないけれど、でもいいこと、アン、それに遠からずなのよ。わたしにはとてもそんなまねはできないわ。けれど、一度だけやってみようとしたことはあったの。自分がだんだん老けて、やがてしぼんでしまうことや、おなじ年ごろの娘たちがみんな、あっちでもこっちでも結婚していくのに気がついたとき、わたしはルドヴィックにほのめかそうとしたのです。ところが、文句がのどにこびりついて出てこないのよ。だからいまではもうどうでもいいの。自分から先にたって、ディックスの苗字をスピードに変えなければならないくらいなら、一生ディックスのままでけっこうですよ。ほら、ルドヴィックにはわたしたちが年をとっていくということがわからないでしょう。自分たちはまだ、うきうきした若い者で、前途をたっぷりもっていると思っているのよ。それがスピード家の欠点なの。あの人たちは死んでしまわなけりゃ、自分たちが生きていることがわからない性分なのよ」

「あなたはルドヴィックをお好きでしょう？」アンはテオドラの矛盾した言葉の中に、まぎれもない悲痛な調子をとらえたのであった。

「ええ、好きですとも」と、テオドラはあっさり答えた。顔を赤らめるまでもない、きまりきったことだと考えているのだった。「それは、もう、ルドヴィックのことはよくよく考えていますけどね、確かにあの人はだれか世話する者が必要ですよ。かまってもらえず、だらしのないようすをしてますものね。それはあなたにもわかるでしょう。ルドヴィックのあの年寄の叔母という

人は、家のことだけはどうやらめんどうをみてくれてますけど、あの人のめんどうまではみてくれないのよ。それに、ルドヴィックも世話をやいてもらったり、すこしは甘やかされる必要のある年代になってきましたからね。ここではわたしが寂しい思いをしているし、あそこではルドヴィックが寂しい暮しをしている。こんなばかげたことはないと思うでしょうね？　わたしたちが古くからグラフトンの笑いぐさになっているのも無理ないと思うわ。まったく、自分でも自分を笑わずにはいられない始末ですもの。ときには、ルドヴィックにやきもちをやかせることができたら、あの人も奮いたつんじゃないかと思うこともあったけれど、わたしに浮気なんてできないし、できたとしても、浮気の相手がだれもいないのよ。このへんではみんな、わたしをルドヴィックのものだと見ているから、だれもあの人のじゃまをしようなどとは夢にも思いませんものね」

「テオドラ、いいことを考えついたわ！」

と、アンが叫んだ。

「おや、なにをしようと言うの？」

テオドラは驚いて声をあげた。

アンは語った。最初のうち、テオドラは笑って反対したが、ついにアンの熱心にほだされて、半信半疑ながら屈してしまった。

「そうね、では、やってみましょうか」と、テオドラは観念した。「もしもルドヴィックが猛烈におこって、わたしを捨ててしまったら、いままでよりもっとわたしはみじめになるけれど、で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com